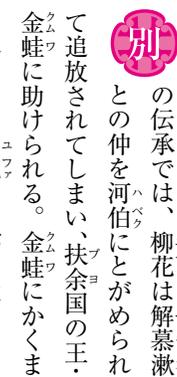




初代高句麗王の母は 水の神様の娘

水の神である河伯の娘という。柳花をめぐっては、面白いエピソードがいくつも伝わっている。伝承のひとつによれば、天界から降臨した解慕漱が川のほとりで水遊びをしていた柳花を見初め、二人は愛し合うようになったのだが、父親の河伯はこれに反対した。河伯が「お前が本当に天帝の子なら、その証拠を見せろ」と言うので、解慕漱は変身合戦を行った。河伯が鱧に変身すると、解慕漱は川瀬になってこれをつらえ、河伯が鹿になると狼に、雉に変身すると鷹になって追いかけた。解慕漱が天帝の子に間違いないと認めた河伯は、とうとう柳花との結婚を認めた。



別の伝承では、柳花は解慕漱との仲を河伯にとがめられて追放されてしまい、扶余国の王金蛙に助けられる。金蛙にかくまわれていた柳花はやがて大きな卵を生み落とした。金蛙はその卵を気味悪がって豚小屋に捨てさせるが、豚は卵を傷つけないように近づかなかった。野原に捨てると、今度は鳥たちが卵を守った。最後に金蛙は自分の手で卵をつぶそうとするが、とても硬くて傷つけることができなかった。金蛙もとうとうあきらめ、卵の中から朱蒙が生まれたという。



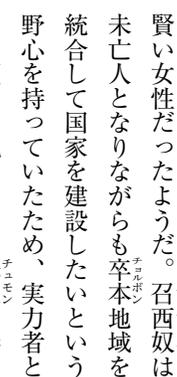
柳花（『朱蒙』）。

元レビドラマ『朱蒙』では、漢軍との戦いで傷ついた解慕漱を助け、後に金蛙の側室となっても解慕漱を想い続ける一途な女性として描かれている。



高句麗建国とあわせ 百済建国でも重要人物

小国の連合体である卒本を率いていた延陀勃の娘。朱蒙の実父・解慕漱の血を引く優台という人のもとに嫁いでおり、夫の間には沸流と温祚という二人の息子が生まれていた。優台が亡くなると、高句麗を建国した朱蒙は卒本で未亡人となり一人で暮らしていた召西奴を呼び寄せて王妃にした。朱蒙は召西奴を愛していたので、義理の息子となった二人にも実子と変わらぬ愛情を注いだという。二人のうち温祚は、後に高句麗のライバルとなる百済を建国することになる（P44参照）。



元レビドラマ『朱蒙』でそのように描かれているように、実際の召西奴も行動力のある賢い女性だったようだ。召西奴は未亡人となりながらも卒本地域を統合して国家を建設したいという野心を持っていたため、実力者として頭角を現していた朱蒙の妻になつたのだという。朝鮮半島最古の歴史書『三国史記』にも、「朱蒙が高句麗を建国して王になったのは、王妃の召西奴による内助の功が大きい」と書かれている。劇中では、朱蒙と相思相愛の関係になりながら彼のライバルである帶素からも求愛されるが、これはドラマの中だけのエピソードである（P28参照）。



召西奴（『朱蒙』）。

百済の偉大な王・近肖近王（P48参照）を主人公にしたドラマ『百済の王クンチョゴワン』にも、百済の建国神話の場面で召西奴が登場している。